

悲哀について

—精神分析の視点から—

杉原 保史

1 精神分析における悲哀の定式化

フロイトは、「悲哀とメランコリー」という一九一五年の論文において、悲哀の問題を取り上げた。現在に至る、悲哀についての様々な心理学的研究は、この論文に端を発している。そこでフロイトの定式化によれば、悲哀とは、現実において対象が喪失されているのに、内的な幻想の世界では依然としてその対象に対する思慕の情が続くことによつて生ずる苦痛である、とされている。また彼は、失った対象に対する思慕の情を最終的に断念し、対象に対する備給を解消する内面的・心理的作業を、悲哀の作業と呼んだ。

この定式化は、理論的にはクリアーで、その後の研究の土台としては十分に確かなものではあったが、後にポウルビイの反論を呼ぶこととなった。ポウルビイは、死別者の経過調査の結果から死別者は失った対象への思慕の情を断ち切ることによつて悲哀から回復するわけではなく、悲哀の過程がうまく進行した場合にはむしろ、その後も永きにわたつてその対象との絆を保ち続ける場合が多いということに注目した。この調査結果に基づいて、ポウルビイはフロイトの定式化を修正し、悲哀の作業とは、失った対象に対する思慕の情を断ち切る作業ではなく、その対象への思慕

の情は維持したままで、その対象を心の中で、現実に見合った適切な位置に配置しなおす作業だとしたのである。

このように、精神分析において悲哀は、最初、死別による愛着対象との物理的な分離の問題として取り上げられた。そして、フロイト以降、こうした意味での愛着対象との現実の物理的な分離の問題にライフ・ワークとして取り組んだのがポウルビイである。そこでまず、ポウルビイに代表されるような、悲哀についての研究の一領域を取り上げ、簡単に見てみることにする。

2 愛着対象との現実の分離 ポウルビイの研究

フロイト以降、死別によつて愛着対象と分離された成人の反応については、エリック・リンデマンを先駆けとして、いくつもの研究がなされてきていた。また、母親と分離された幼児の反応についての研究も、アンナ・フロイトやR・スピッツ、M・D・アインスワース、J・ロバートソンなどによつて手掛けられていた。これら一連の研究は、いずれも現実の愛着対象の物理的な喪失を扱ったものである。ポウルビイはこうした一連の研究成果を集大成し、『愛着と喪失』と題された著作にまとめた。

こうした研究は多くの事実を明るみに出し、ポウルビイの著作には、愛着対象から物理的に分離された子供や成人の反応が、記述的・観察的なレベルで豊富に記載されている。

たとえば、そこに記述されている現象には以下のようなものが挙げられる。

死別者が、愛着対象の死の知らせを受け取ってから、悲哀の作業を成し遂げ、社会的・心理的に回復するまでの間に、どのような経過を示すか。

そうした悲哀の作業が障害される場合には、どのような現象が現れるか。

悲哀の作業を困難なものにする条件にはどのようなものがあるか。

悲哀の作業を促進するために、どのような働きかけが有効か。

母親と一時的に分離された子供は、どのような反応を示すのか。

こうした研究によって、それまであまり理解されていず、ともすれば無視されてきた様々な種類の喪失への反応が、より深く理解されるようになった。その結果、心理療法家はクライエントの生育歴における過去の分離体験により注意を払うようになったし、母親と分離された幼児にはそれなりの配慮が必要であることが認識されるようになった。欧米では死にゆく人へのホスピスとともに、遺族へのグリーフ・カウンセリングの必要性が認められるようになり、実際に行われているようである。

つまり、ボウルビイに代表される一連の研究により、ストレスフル・ライフ・イベントとしての対象喪失が適切に認識され、ふさわしいケアが与えられるようになった。こうした意味で、これらの研究は我々の精神保健にとってたいへん大きな貢献を果たすものであったと言える。そしてまた、悲哀の研究を振り返る時、これら一連の研究は、一つの広大な領域を構成しており、無視して通ることは出来ない。

ただししかし、こうした研究においては、現実の物理的な対象喪失に際して、どのような反応が行動として現われるか、どういった環境条件がそれを左右するか、といったように、外的現実の諸要因に注目する度合いが大きいような印象を受ける。もちろん、それは大切なことではあるのだが、フロイトが問題にしていたは

ずの内的対象世界の理解という点では、物足りなさを感じるのである。

そこで、対象喪失について、内的対象世界という面での理解を深めるために役立つものはないかと探している時に私が出会ったのが、マラーの研究である。

次にマラーの分離—個体化過程の研究を取り上げ、簡単に説明する。

3 分離—個体化過程 マラーの研究

この領域を代表する研究者はマラーだが、マラーの他にも、F・バイン、A・バーグマン、J・B・マクデビットといった研究者による研究も含まれる。

マラーは、分離—個体化過程という、乳幼児の認知的—情緒的発達過程を詳細に研究した。簡単に言うと、彼女の研究では、子供の中に自己と他者の概念が成立してゆく過程が調べられた。彼女は、新生児は、明確に分離—独立した自己と他者という概念を持っていないと考えた。これはつまり、新生児は主観的体験として快や不快を体験するが、そうした快・不快が、自己の活動に由来するものか、他者の働きかけに由来するものかを明確に分化させて理解することはできないということである。新生児の体験は、快—不快という主観的な基準で分類されることはあっても、自己—他者という客観的な基準によつては分類されることはない。しかし、赤ん坊は成長するにつれて次第に、自らの体験を、自己—他者という概念でもって整理・分類するようになる。その過程を解き明かしたのが彼女の分離—個体化の理論である。

彼女の研究は、先に紹介した対象喪失の研究とは異なり、直接

に悲哀の作業を問題にしたものではない。しかし、私は次のような理由から、これを悲哀のテーマにとって重要と考える。(1) この分離—個体化の過程において、幼児は喪失と悲哀を体験する。(2) その結果獲得されるリビドー的对象恒常性は、対象との安定した愛着関係の内在化を表わすものであり、その後起こるあらゆる対象喪失はこれを基に生じてくる。(3) こうした一連の内的力動についての考察は、その後の対象喪失を理解する上で有効な概念を提供している。

では、以下にマラーの分離—個体化の理論を簡単に説明する。新生児は、最初、外界に比較的無反応である。この時期を彼女は正常な自閉期と呼ぶ。

その後、乳児は正常な共生期と呼ばれる時期に入っていく。この時期の乳児は、先に述べたように、自己と他者という概念をまだ持っていないので、自己と他者との一体感の錯覚を持ち易い。万能感に満ちた母親との一体性が、この時期を特徴づける。

しかし、乳児は次第に外界を明確に認識するようになっていく。共生の錯覚から目覚めてゆくのである(孵化)。これが分離—個体化の最初の下位段階、分化期の始まりである。共生期には母親に抱かれるとその身体にびったりとくっついていた乳児も、分化期には、母親に抱かれつつも身体をそらして、母親の顔をいじくったりして探索し始める。

さらに一歳近くになると、直立歩行が始まる。歩行できるようになった幼児は母親から離れて自分の世界を探索しはじめる。もちろん、まだ、母親が見える場所において、時々そこに戻って行くことが必要ではあるが、それでもこの時期の幼児は探索に夢中になるあまり、しばしば母親の存在を忘れるほどである。こうした

探索活動において、幼児の気分はたいへん高揚し、喜びにあふれている。これが運動練習期である。

この次に再接近期が来る。再接近期の幼児は母親の存在が気がかりで、母親につきまとうことも多くなる。また、悲しみや苦しみの情緒が目立つようになる。この時期には、幼児は自己とは分離し、独自のイニシアティブを持った存在としての母親に気づくようになるのだと考えられる。幼児はここに来て、共生期の母親との一体感を喪失したことに気づくのである。この喪失を乗り越えることが、この時期の幼児にとって、大きな課題となる。

つまり、分離—個体化期を通して、幼児は心の中の母親イメージを、万能感的なものから、より現実的なものにしてゆくのである。母親は、快を与えてくれるよい面と、必ずしも自分の思い通りにならない悪い面とを併せ持った一つの対象として捉えられるようになる。このように現実により適合した母親イメージが確立されることは、この時期の幼児の輝かしい達成ではあるが、幼児の主観的体験としては、これは喪失と感ぜられると言う。

この喪失は、この時期の幼児に強い怒りを喚起する。この強い怒りのために、幼児は、よい母親のイメージを内的に呼び起こしてそのイメージから安心感を得るという能力が利用できなくなるという現象が観察される。再接近期の幼児の母親に対する激しい怒りは、母親の内的イメージを大変不安定なものにしてしまう。幼児は、母親への怒りに直面して、よい母親のイメージを守るために、悪い母親イメージとよい母親イメージとを分裂させるといふ防衛を働かせる場合もある。こうした分裂は、リビドー的对象恒常性に大きな打撃を与える。良い面も悪い面も一つの母親イメージに統合されることによって、怒っているときもよい母親イ

メージを維持することが出来るようになる。怒りを感じている時にもその対象の統合を保つ能力を、ほとんどの子供は、だいたい三歳頃までに獲得する。

4 二つの領域の比較、関わり合い

ボウルビイらの研究では、現実における具体的な対象の喪失が扱われていた。そこでは、現実の世界に、実際に大きな変化が生じている。これは、人生に突然侵入してくるショックで外傷的な出来事である。

マラーらの研究では、現実の世界にはそれほど大きな、目立つた変化はない。母親そのものは、変化していない。ただ、子供が発達するにつれて、彼の母親の捉え方が変化してゆくのである（脱錯覚）。現実の母親そのものは変わらないのだが、脱錯覚によって、彼の内部で喪失が生じる。突然にショックな出来事が侵入してくるのではなく、発達上、徐々に変化が生じている。

F・パインは、ボウルビイが扱った種類の問題を separation の問題と呼び、マラーが扱った種類の問題を separateness の問題、あるいは分離意識の問題と呼んで区別している。

また、ボウルビイの研究で扱われているのは対象 object の喪失であるが、マラーの研究で扱われているのは、前対象 pre-object の喪失であるとも言える。

そのような違いはあるにしても、これらの研究はいずれも喪失と、それに対する悲哀の作業を扱っていることは確かである。それぞれ、フロイトが「悲哀とメランコリー」において蒔いた種が異なつた方向で実を結んだものであると言えるだろう。

ボウルビイらの研究の中で明らかにされた現象を理解する上で、

マラーらの用いた概念は大変有用であると思われる。成人の対象喪失からの回復過程は、幼児期におけるリビドー的对象恒常性確立の過程を反復するものとさえ言えるかも知れない。

(本学専任講師 教育学)